

お札にみる助け合い

この程、小野地区の旧家で文政7(1824)年の銘がある棟札が発見されました。棟札は建物の棟上げに際しての祈祷のお札に由来し、現在でも屋根裏の梁などに打ち付けられることがあります。発見された棟札はそれ自体大変貴重な史料ですが、それを覆うように様々な紙のお札類が貼り付けられており、当時の民間信仰のひとこまをうかがうことができました。

その中に観音菩薩と思われる仏像と「西国四国大社」の文字を木版で刷り、その下に越後国神原郡庄左衛門と手書きされたお札がありました(写真)。内容や形から、これは参拝者が神社・仏閣に貼り付ける千社札(納札)に相当するものと考えられます。越後国神原(蒲原)郡は現在の新潟市付近です。どうやら庄左衛門さんは、西国三十三所と四国八十八所それぞれにおもな神社を巡る大巡礼旅行の途中で小野地区に立ち寄ったようです。このお札の木版刷りは極めて素朴で、民芸品ともいふべき作風です。また通常千社札は住所や名前をあらかじめ印刷する場合がありますが、この場合は手書きです。あるいは越後の庄左衛門さんは、巡礼のための地元の互助会(頼母子講)から旅費やお札の支給を受けて旅に出ているのかもしれない。

なぜ小野地区の民家に巡礼者のお札が残されたのでしょうか。市史第9巻民俗編にもあるとおり、鉄道開通以前の小野地区は摂津と丹波などを結ぶ重要な街道筋でした。庄左衛門さんは中山寺または播磨の清水寺方面からの道中で、このお宅に宿を求め、そのお札にお札を置いていったのかもしれない。棟札での扱いからみて、巡礼者のお札も神仏のお札と同様に大切に扱われたことがうかがわれます。三田の街道沿いには巡礼者をめぐる伝承や史料が多く残されていますが、旅の巡礼さんと地域の人々との交流は、信心と助け合いの精神とに彩られていたようです。



巡礼者のお札